東北家庭科教育研究　No.3 pp. 1-9　(2004.7)

児童・生徒の家庭生活における意識・実態調査 東北データの分析（第１報） －地域別の家庭科学習結果と家庭生活認識の特徴－

中屋紀子[*1]，渡瀬典子[*2]，日景弥生[*3]，長澤由喜子[*2]，
浜島京子[*4]，黒川衣代[*5]，高木　直[*6]，砂上史子[*3]

[*1] 宮城教育大学，[*2] 岩手大学教育学部，[*3] 弘前大学教育学部，
[*4] 福島大学教育学部，[*5] 秋田大学教育文化学部，[*6] 山形大学教育学部

Survey on Children's Consciousness and Behavior in Family Life: Analysis of the Data in the Tohoku District (1) - Regional Characteristics of Learning effects of Home Economics and Perception of Family Lives -

Noriko NAKAYA *Miyagi University of Education*
Noriko WATASE *Faculty of Education, Iwate University*
Yayoi HIKAGE *Faculty of Education, Hirosaki University*
Yukiko NAGASAWA *Faculty of Education, Iwate University*
Kyoko HAMAJIMA *Faculty of Education, Fukushima University*
Kinuyo KUROKAWA *Faculty of Education and Human Studies, Akita University*
Nao TAKAGI *Faculty of Education, Yamagata University*
Fumiko SUNAGAMI *Faculty of Education, Hirosaki University*

はじめに

本報告は，2001年に日本家庭科教育学会が行った「児童・生徒の家庭生活における意識・実態調査」の東北データの分析を行う。全国調査は，1. 児童生徒衣食住などに関する生活技能の実態及び，2. 発達段階による変化や，地域別特徴を明らかにし，3. その結果を家庭科カリキュラム構築の基礎資料とすることを目的として取り組まれた[1)]。東北地区では全国調査委員会から要請された数以上にデータを集め，東北地区においての先の特徴を明らかにしたいと考えた。地域別，家族構成別，母親と父親の就労形態別，および高校生にポイントを絞った4視点から分析し，4報に分けて報告する。第1報では学年別に明らかになった全国データとの比較した結果[2)]，東北に特徴があった点を取り出し，地域別の検討結果を報告する。

（受付 2004 年 3 月 30 日／審査終了 2004 年 4 月 28 日）
*1 〒981-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉　宮城教育大学

研究方法

東北データを地域に区分し，学年別に集計された全国調査結果と比較検討する。検討にあたって，まず，地域区分を行った。まず，町村部を別の一つのグループとした（以下Ｉと記す）さらに，中核都市からは離れていて通学圏も独自に持っている地方都市を別のグループに位置付けた（以下IIと記す）。全国委員会の地域区分では大都市は，県庁所在地に限られていたが，県庁所在地に限らず，大学がある都市を地方中核都市として位置付け，一つのグループとした（以下IIIと記す）。そのさい，それぞれの都市の衛星的な位置にある市・町村を中核都市・地方都市のなかに位置付けた[3)]。

考　察

1．東北データの特徴

本調査を取り組むにあたって，東北では地区の特徴を反映できるデータ収集をしたいと考え，可能な限り町村部の学校からのデータ回収につとめた。その結果，集約した4，680のデータのうち全国データの集計基準に照らすと，都市43%，地方都市31%，町村26%となった。全国調査委員会からの指示では都市6，地方都市3，町村部1の割合で調査するように要請されたものであった。県別集計結果は，青森467，秋田1，174，岩手673，山形595，宮城723，福島1，048であった。小学校23校，中学校21校，高等学校19校から協力をえた。

県別のデータは各学年バランスよく集めた青森･山形，全体的に数が多かった福島，小学校が多かった岩手，中学校が多かった宮城，小4と中2が少なく，高校が多かった秋田など，それぞれに特徴があった。男女別構成比は，全国データとほとんど変わりがなかった。しかし，秋田県の高2及び小6のデータについて調整することにし，それを基本データとした。その結果，全数で4346データとなった。県別の学年別結果を図１に示した。

地域区分別・学年別のデータの割合を図２に示した。IIIで小4が少なく，逆に高2が多くなっている。

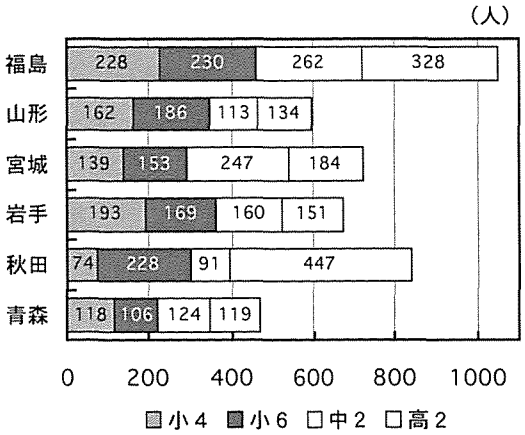
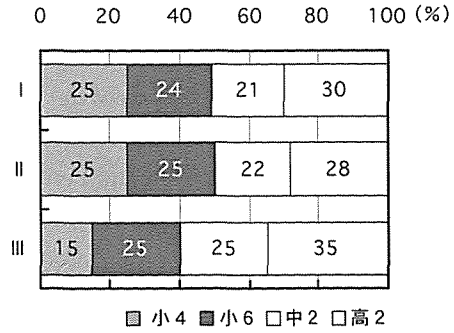


図１　県別・学年別データ集約結果(調整後)

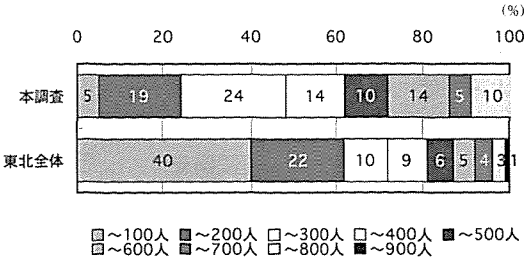


Ｉは町村部，IIは地方都市，IIIは地方中核都市を指す

図２　地域区分別・学年別のデータの割合

(1)　学校基本調査結果からみた東北データの特徴

平成13年度の学校基本調査結果を見ると，図3に示したように，東北6県の小学校は，約50%が10学級以下であるのに対し，本調査では10学級以下は24



東北全体の数値は，各県のホームページに掲載された平成13年度学校基本調査のデータから計算した。ただし，宮城県のみ，平成14年度によった。

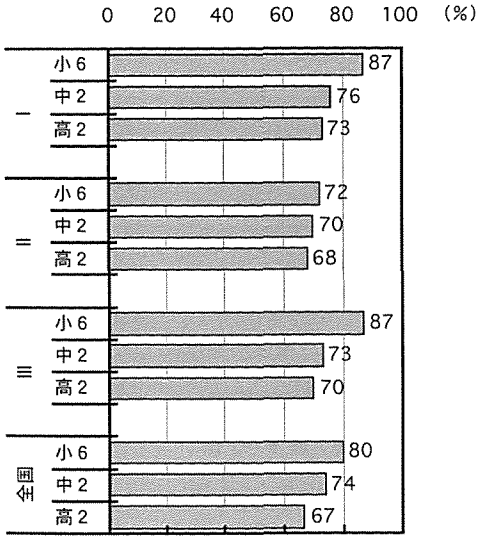
図３　学級規模別学校数の割合（東北の小学校）

%しかなかった。逆に，20学級以上の学校は基本調査で約5%であるのに対し，本調査では20学級以上は約20%もあった。中・高校でも同じような傾向を示した。本調査では，結果として中～大規模の学校からデータを集めたことになる。データの代表性という点では，問題を残した。

2. 地域別にみた家庭科の学習の結果

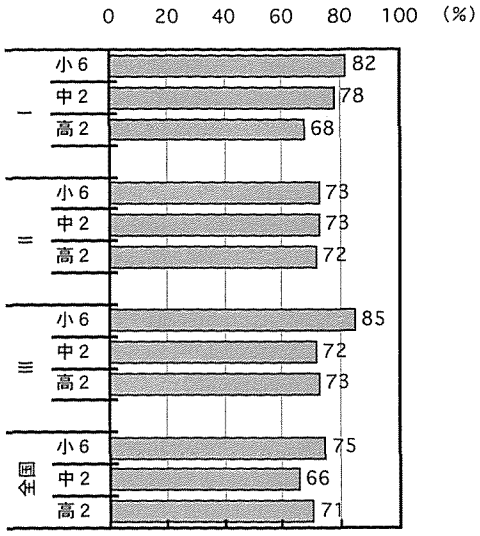
(1) 家庭科の学習の結果，達成感も大きく，また期待も大きい

「家庭科を学習した結果」(達成感) の項目では地域差が明確にあらわれた。図4～図7を見ると，地域Ⅰと地域Ⅲの小6では，「家庭科を学んでできるようになったことあり」(家庭科を学んで「日常生活についてできるようになったこと」が「たくさんある」と「少しある」を合計した数である。以下同じようにした。) と「同　わかるようになったことあり」が90%近くを占め，「同　気づくようになったことあり」を選択したのが70%近くを占め，「同　考えるようになったことあり」を選択したのが



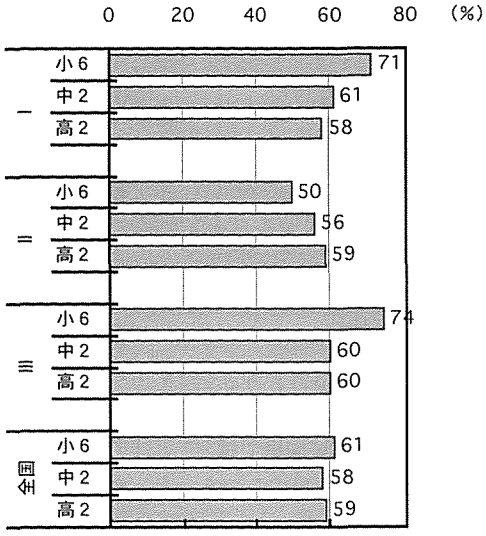
家庭科を学んで「日常生活でできるようになったこと」が「たくさんある」と「少しある」を選択した割合を示した。

図4　家庭科を学んで「できるようになったこと」ありの割合



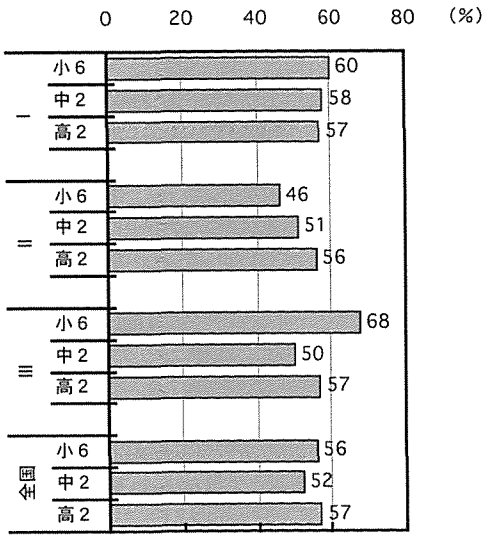
家庭科を学んで「日常生活で分かるようになったこと」が「たくさんある」と「少しある」を選択した割合を示した。

図5　家庭科を学んで「分かるようになったこと」ありの割合



家庭科を学んで「日常生活で気づくようになったこと」が「たくさんある」と「少しある」を選択した割合を示した。

図6　家庭科を学んで「気づくようになったこと」ありの割合



家庭科を学んで「日常生活で考えるようになったこと」が「たくさんある」と「少しある」を選択した割合を示した。

図7　家庭科を学んで「考えるようになったこと」ありの割合

60%近くを占めた。いずれも，全国平均を上回り，また，地域Ⅲの方が地域Ⅰよりも高い割合を示した。都市部の小6で，家庭科を学んでもっとも高い達成感があったが，わずかの差で，町村部の小6が続いていた。

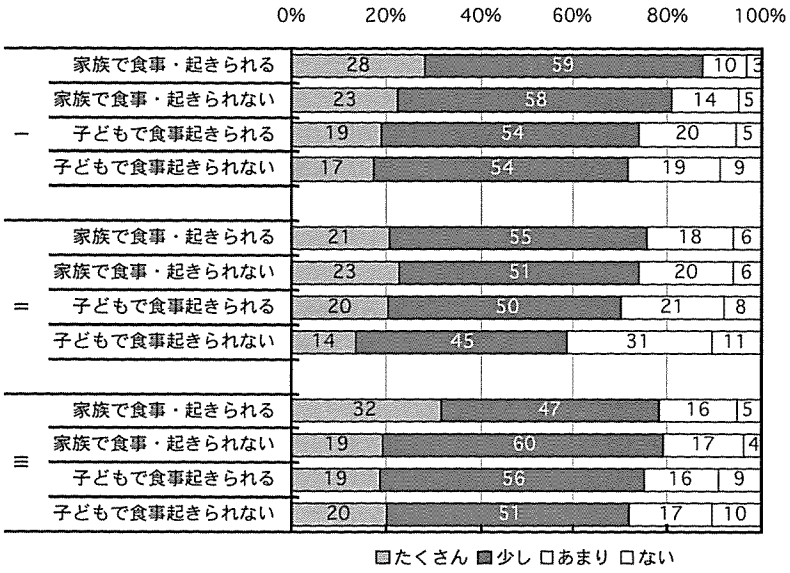
地域Ⅰでは，家庭科を学んで「できるようになった」(以下「できる」と表記)「わかるようになった」(以下「わかる」と表記)「気づくようになった」(以下「気づく」と表記)「考えるようになった」(以下「考える」と表記)いずれも，小6がもっとも高いパーセンテージを示し，それに次いで中2が続く値を示し，高2で底値を示した。このパターンは全国とも共通している。Ⅱでは「できる」のみがⅠと同じ傾向を示したが，「気づく」と「考える」ではⅠやⅢと逆の傾向を示した。地域Ⅲでは，Ⅰと同じ傾向を示したのは「できる」項目のみであった。小6がいずれの項目で，もっとも高いパーセンテージを示した。また，いずれの地域でも「できる」が学年進行に伴って，下降していた。

(2) 家庭科学習の結果と家庭生活のようす

「家庭科を学んでできるようになった」にポイントをあてて家庭内の仕事と生活自立の結果をクロスした。「起床時のようす」と「朝食を家族ととる」をあわせてパターン化したのが，図8である。生活習慣確立の様子を「朝，一人で起きるか」と「朝食を誰ととるか」を組み合わせて判断しようとしたものである。「家族で食事・一人で起きられる」「家族で食事・一人で起きられない」「子どもで食事・一人で起きられる」「子どもで食事・一人で起きられない」の順で「家庭科でできるようになった」割合が地域ⅠでもⅡでもⅢでもいずれも漸減している。また，生活習慣の確立と家族との共食が地域Ⅰで最も高い割合を占めていることがわかる。従って，家庭科を学んで「できるようになった」と感じることと生活習慣の確立と家族との共食が密接な関連のあることが示されていると考えられる。

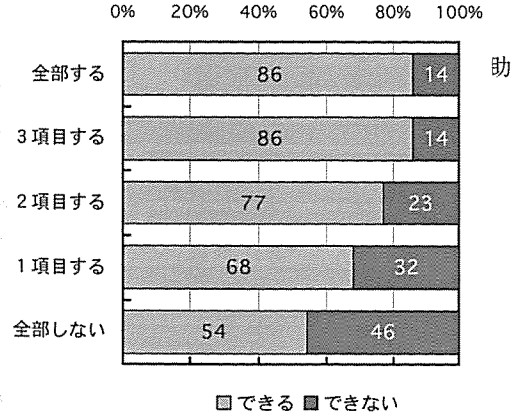
基本的な家の仕事を児童生徒がしているかどうかをはかるために，基本的な家庭のなかの仕事として「食器洗いをする」「洗濯機をかける」「洗濯物をたたむ」「部屋を掃除する」「家族から頼まれた買い物をする」を選んで，それを「5つする」，「4つする」，「3つする」，「2つする」と，「家庭科を学んでできるようになった」こととクロスした結果が図9である。3項目以上が約9割で「できる」と答え，「全部しない」が約5割と一定の傾向が示された。家庭でよく基本的な仕事をするほど，家庭科を学んで「できるようになった」と答える児童生徒が多い傾向があることが示された。「できる」以外の家庭の仕事を「「食器洗いをする」「洗濯機をかける」「洗濯物をたたむ」「部屋を掃除する」「家族から頼まれた買い物をする」の5項目を「全部する」，「3項目する」，「2項目する」，「1項目する」，「全部しない」の5カテゴリーに分けた。それと，「家庭科を学んでできるようになったこと」が「たくさんある」と「少しある」を「できる」とし，「あまりない」と「ない」を「できない」とした。

さらに，人間関係での仕事との関係を見るために，家庭科を学んで「できるようになった」と「家の仕事－お年寄りや体の不自由な人の手助けをする」(図では老と記した)と「家の仕事－子どもの遊び相手をする」(図では幼と記した)をクロスした。その結果を示したのが，図10である。



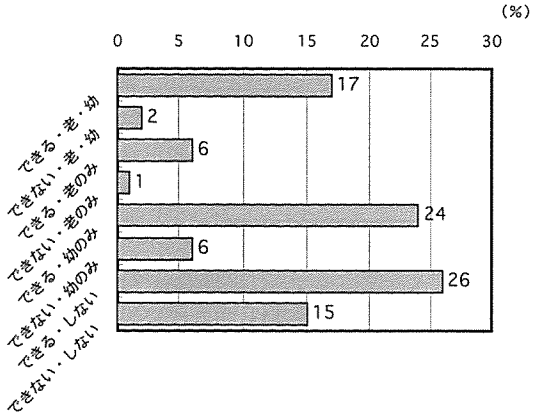
注1)朝食を「家族と食べる」と「大人と食べる」を「家族で食事」とした。「子どもだけで」と「1人で」を「子どもで食事」とした。
注2)朝，いつもとたいてい「1人で起きる」起きるを「起きられる」とし，たいていといつも起こしてもらうを「起きられない」と記した。
注3)「たくさん」は「たくさんある」，「少し」は「少しある」，「あまり」は「あまりない」である。

図8　地域別・生活習慣の確立態様・共食態様の関係



「わかる」，「気づく」，「考える」でも同じような傾向を示した。

図9　家庭内の基本的な仕事と「家庭科を学んでできるようになったこと」との関係

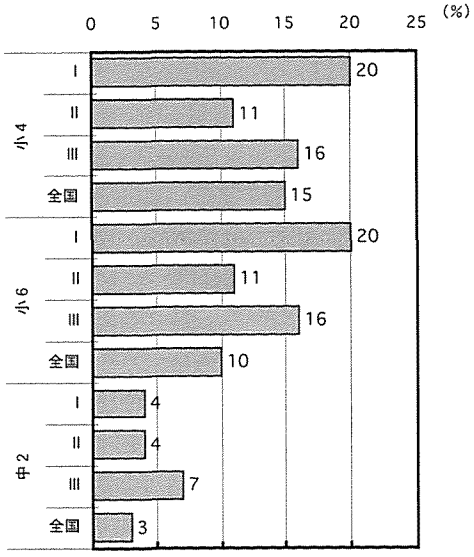


家庭科を学んで「日常生活でできるようになったことがたくさんあると少しある」を「できる」とし，「できるようになったことがあまりないとない」を「できない」とした。また，「家の仕事をする－お年寄りや体の不自由な人の手助けをする」(「いつも」と「ときどき」) を「老」とし，「家の仕事をする－子どもの遊び相手をする」(「老」と同じ) を「幼」とした。

図10　人間関係についての家庭内の仕事と家庭科を学んでできるようなったこととの関係

けと子どもの世話の両方をすると答えたデータであるが，「できるようになった」が17%，「できるようにならなかった」が2%であり，家庭科を学んで「できるようになった」と答えた方が圧倒的に高いパーセンテージを示す。「お年寄りの世話」のみをすると答えたものも，「子どもの遊び相手をする」のみと答えたものも同じような傾向が見られた。しかし，「家庭科を学んでできるようになったが，手助けも世話もしないという」答えは，「できるようになった」がもっとも高いパーセンテージを占め，しかも，「できようにならなかったし，手助けも世話もしない」よりも，10%も多い。人間関係調整のしごとと家庭科を学んでの達成感とは，必ずしも強い関連性があると判断することができなかった。

また，「もっとすすんで仕事をするようにしたい理由」を問う質問のなかで，答えの中で「家庭科で学ぶから」という理由をあげたものを図11で示した。地域Ⅰの小4と小6で，20%を占めた。全国では小4で15%，小6で10%であり，中2でも地域Ⅲでは7%，全国では3%と，全国との大きな差が認められ，家庭科への期待が大きいことがわかった。



家の仕事をもっとすすんでするようにしたいと思う理由6項目のなかで選ばれた割合

図11 「もっとすすんでするようにしたい」理由に「家庭科で学ぶから」をあげた割合

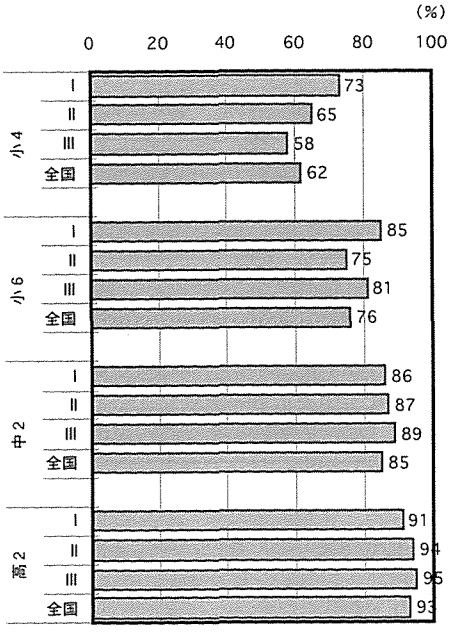
3. 東北の児童生徒の家庭生活をめぐる特徴

家庭科を学んだ結果，達成感があることと関連があるデータとしては，以上に限られたが，家庭生活での仕事や，生活を営む上で意識して取り組んでいることや家庭生活への希望を質問したなかから，東北地区で全国と比較して特徴のあるデータが何点かあった。それについて特記し，考察したい。

(1) 東北の児童生徒が比較的多く取り組む家での仕事

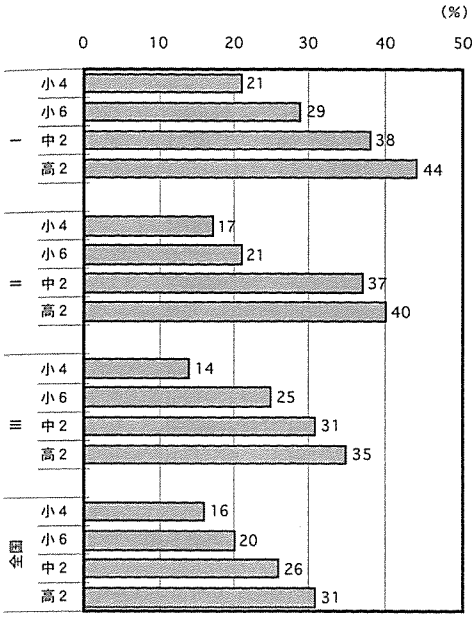
まず，東北の児童生徒は，衣服に関する仕事をよくする。図12に見られるように，東北の児童生徒は「家の仕事―季節に合った服装を自分で決める」では，全国との差が大きかった。特に，地域Ⅰでの小4や小6では，11%，9%の差があった。小6で，全国の中学生並みの取り組み方である。

また，洗濯もよくする。図13に示した。小4，小6で「服装を自分で決める」と同じ傾向を示した。さらに，中2，高2では，すべての地域で全国を大きく上回り，特に地域Ⅰでは10%以上も差が出た。



「季節にあった服装を自分で決める」を「いつもする」及び「ときどきする」を合わせた割合

図12 「季節にあった服装を自分で決める」割合・学年別・地域別比較



「洗濯機で衣服の洗濯をする」を「いつもする」及び「ときどきする」を合わせた割合

図13 「洗濯機で衣服の洗濯をする」・学年別・地域別割合

(2) 家庭生活でのその他の特徴

家の仕事では，「家族から頼まれた買い物をする」，「パソコンを使って暮らしの情報を集める」，「コンビニで雑誌を買う」など，町村部の地域的な特徴を反映したデータをのぞいて，全国データと比較して，違いがあった項目を表1に示した。全国データと比べて，パーセンテージの差を数値で示した。家の仕事では「フライパンやなべを使って料理する」，「家族の夕食を作る」，「ほうちょうで食べ物を切る」，「子どもの遊び相手をしない」に大きな差がある地域や学年がみられた。それらは2種類の網掛けで示した。全国と比して東北で高い値が出た結果を薄い網掛けで示し，逆に低い値が出た結果を濃い網掛けで示した。家庭生活の課題を意識化しているものとして「(家のしごとを) もっとすすんでするようにしたい理由」として，「家族がよろこぶから」，「住みやすい地域になるから」で，「(家のしごとを) もっとじょうずにできるようになりたい理由」として「自分のことは自分でしたいから」，「男・女だから」の項目で大きな差があった。さらに，家庭生活への要求とか望みなどに位置づけられる「自分の部屋で大切にしたいこと」では，「自分の部屋に鍵をつけて家族がはいらないようにする」で，「家庭にもっと望むこと」で「お金がたくさんある」で全国との開きがみられた。また，「家庭生活を楽しくするために，家族の努力が必要である」という内容をまとめて，「家庭生活を楽しくするため一番大切なこと」の問いのなかから「家庭の仕事を受け持つ」，「家族と話し合う」，「家族といっしょに行動する」を選択したものを併せて全国データと比較したものを最後に示した。それも差があった。

特に，地域Ｉでは，小4と高で，対照的な特徴がみられたので，それを抜き出し，図14に示した。

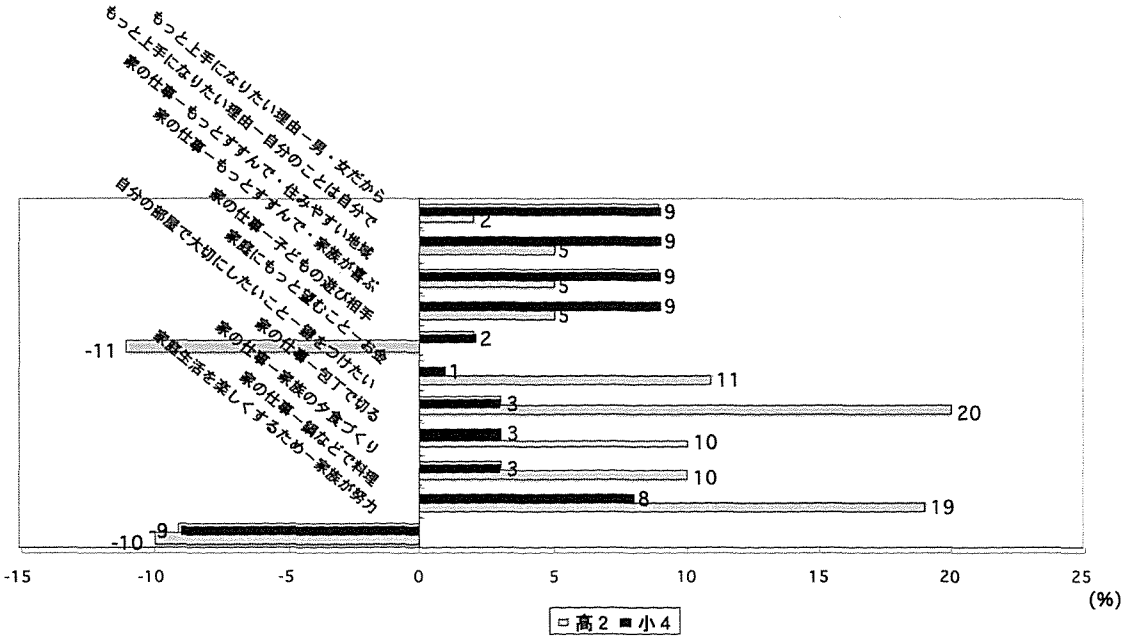
地域Ｉの小学生と高校生に共通していたのは，家庭生活を楽しくするために，家族が努力するという項目で10%全国よりも下回ったことのみである。高校生では，「自分の部屋でしたいこと」では「鍵をつけたい」(20%)，また「家の仕事をしたい－鍋などで料理」(19%)と高い値を示した。また，「家庭に望むこと」では「お金」(11%) を，「家の仕事をしたい－家族の夕食作り」や「「家の仕事をしたい－包丁で切る」がそれぞれ10%高く，「家の仕事をする－子どもの遊び相手をする」は10%，逆に「家庭生活を楽しくするため－家族が努力」は，10%下回っていた。家族への求心力が高校生とともになかったと判断された小4であったが，「うちの仕事をもっとすすんでしたい理由」として「家族が喜ぶ」や「住みやすい地域にしたい」や「もっと上手になりたい理由として自分のことは自分で」や「男の子だから・女の子だから」をあげた者が10%近くを占め，慣習的な考えにとらわれていたり，地域や家族への思いもあることが示された。

表1　地域別・学年別の全国データと差があった項目

地域	学年＼項目	家の仕事				もっとすすんでするようにしたいと思う理由		上手にできるようになりたい理由		自分の部屋で大切にしたいこと－鍵をつけたい	家庭にもっと望むこと－お金	家庭生活を楽しくするため－家族が努力＊
		鍋などで料理	家族の夕食づくり	包丁で切る	子どもの遊び相手しない	家族が喜ぶ	住みやすい地域	自分のことは自分で	男・女だから			
I	小4	8	3	3	2	9	9	9	9	3	1	-9
	小6	4	6	4	-3	1	0	5	1	11	3	-1
	中2	8	2	4	1	2	-1	3	4	4	1	0
	高2	19	10	10	-11	5	5	5	2	20	11	-10
II	小4	7	0	1	0	2	-4	0	1	9	8	-3
	小6	-1	0	0	6	-2	1	1	1	3	11	-5
	中2	2	-3	-1	-6	0	2	-1	3	0	-2	1
	高2	5	-1	6	1	2	-1	6	0	1	8	-6
III	小4	-2	3	-7	11	-9	-3	0	1	0	6	-4
	小6	2	-1	2	0	1	0	5	0	-2	4	8
	中2	-1	-1	1	3	-3	-1	3	1	4	0	-1
	高2	-4	-3	-6	1	-2	0	1	-1	3	-1	1

注1）「家庭生活を楽しくするための一番大切なこと」として「家庭の仕事を受け持つ」「家族と話し合う」「家族と一緒に行動する」を選択した割合

注2）薄い網掛けは、全国と比較して、10%近く差が大きかった項目で、濃い網掛けは、逆に少なかった項目のパーセンテージである。



＊　項目は，表1と同じである。

図14　地域Iにおける小4と高2の家庭生活や家庭生活を巡る意識の差

まとめにかえて
ーカリキュラムへの提言ー

東北地区のデータの特徴から地域カリキュラムを構想するとき，以下の点に留意することを提案し，まとめに代えたいと考える。

① 生活習慣が確立しており，基本的な家庭内の仕事ができているほど，家庭科を学んで，達成感が高いことがわかった。この結果は，学校家庭科だけの成果とは一概にはいえない。家庭の文化に依存した結果ともいえるからである。他方，生活習慣の確立，基本的な家庭内の仕事ができていない児童生徒にこそ，家庭科を学んで達成感を大きくする必要があると思われる。そのためにはどうしたらよいか，大きな課題が突きつけられたと思われる。

② 町村部の小4と高2に，児童・生徒の家庭生活における意識・実態できわめて特徴的な結果を見いだした。それは，家族への求心力が全国に比べ低いなかで，小4では地域をよくしたりや自己実現の課題をも持つが，伝統的な考えにもとらわれているという児童の姿を描き出すことができた。他方，高校生は食生活への関心が高く，幼児の遊び相手をよくするなどの家庭生活を営む上での能力があるものの，お金や家族からの干渉を避けた部屋への要求が強いという生徒の姿が描き出された。これら児童生徒の積極面を生かし，課題を克服できる展望を持った家庭科学習が要求されていると思われた。

謝　辞

調査に，協力してくださったたくさんの児童生徒と学校長及び担当の先生方に感謝したい。

また，データ入力にはコムネットJと，宮教大の兒玉重嘉君にお世話になった。記して感謝したい。

最後になったが，データを公開してくださった日本家庭科教育学会「児童・生徒の家庭生活の意識・実態と家庭科カリキュラムの構築」全国調査委員会（牧野カツコ代表）に感謝する。

註

1) 日本家庭科教育学会　児童生徒の家庭生活の意識・実態と家庭科カリキュラムの構築—家庭生活についての全国調査の結果—　2003年3月
2) 上記報告書では，各項目別の学年別の結果が報告されている。全国との比較はそれと比較をしたものである。
3) 調査対象都市は，人口規模では20万人から100万人とバラツキがあったが，一括した。福島県では県庁所在地である約30万人の福島市よりも人口が多いいわき市，郡山市があり，青森も青森市と八戸市と弘前市がそれぞれ，30万、25万20万と並んでいる。そこで，人口規模に加えて大学の存在を都市機能として位置付けた。さらに，それらの都市郊外も都市圏に位置づけた。その中核都市の都心部では，高いビルと大きな建物に囲まれ，東京都心部と変わらない風景であるが，見通しのよいところから，近くにピラミダルな山が見えるという景観上の特徴をも共有している。また，地方都市としての独立した通学圏については，宮城県古川市にある古川高校のデータを参考にした。（東北大学大学院経済学研究科上園知明「住民生活と地方自治体のかかわりについての調査」2002年6月）